

## 論文の内容の要旨

論文題目 金子光晴・森三千代の海外体験と異郷文学

氏 名 趙 怡

本論文は、詩人金子光晴（1895-1975）と妻で小説家の森三千代（1901-1977）が経験した数度の海外旅行と二人が書き残した関連作品について、比較文学・比較文化の視点と方法論に基づいて検証したものである。

金子光晴は1928年暮れ、夫婦関係の修復と生活苦からの脱出を図るため、十分な旅費もないまま妻を連れて日本を離れた。上海、香港、シンガポール、マレー半島を経由し、フランス、ベルギーで各一年間ほど滞在するもので、その旅程は四年弱に及ぶ。この「放浪の旅」は、詩人が晩年に書いた『どくろ杯』（1971）、『ねむれ巴里』（1973）、『西ひがし』（1974）（共に中央公論社刊）の自伝三部作を通して広く知られている。散文詩的な筆致と鋭い洞察眼で、上海とパリという国際都市の内面とその底辺にある日本人社会の実態を描き出したのみならず、南洋の大自然と植民地の現実を活写したこれらの作品は、発表当時、高度成長期で海外への関心が高まりつつあった日本で大きな評判を呼んだ。今日に至っても自伝文学の傑作として読み継がれている。

しかし金子光晴の自伝三部作には記憶錯誤や脚色が多く、「史実」として扱うことは難しい。また夫婦の海外体験はこの「放浪の旅」に限らず、1926年春と1928年春（後者は金子のみ）の上海および周辺都市への旅行、そして日中戦争が全面勃発した1937年の暮れに行った「北支」（日本占領下の天津・北平）への旅なども数えられる。さらに太平洋戦争が勃発した翌年の1942年、すでに女性作家として名声を博した森三千代は、国の「文化大使」として「仏印」（フランス領インドシナ）への公式訪問も行っている。

これらの海外体験について、二人は旅行当時から最晩年に至るまで、数多くの詩作、紀行文、日記、自伝、小説に書き残し、さらに金子は絵画まで描いた。日本の近代作家の中で、金子光晴・森三千代ほど東洋・西洋・南洋を共に経験し、かつ語り続けた作家はいない。しかも夫婦は互いに意識し合いながら創作活動を重ねており、森三千代の小説が光晴の自伝三部作の一部の下地にもなっていると思われる。しかしこの事実はこれまでほとんど看過されており、彼らの海外体験と作品に関しては、ほぼ金子光晴の自伝や一部の詩作・エッセイのみに依拠して論じられ、実証的な考察が極めて不足している。森三千代については、かつて高名な作家であったにもかかわらず、今日ではほとんど「金子光晴の妻」としてしか知られておらず、その作品に関する考察はごく一部に限られている。

こうした実態に鑑みて、本論文は、これらの海外体験について、夫婦の視点と作品を合わせ見ながら、その実態を検証することを目指す。夫婦双方の作品を整理・発掘し、テキストに即して解説していくことが作業の中心となる。金子夫婦の長男の妻である森登子、金子光晴の研究者である原満三寿を含む多くの関係者からの惜しみない協力を得つつ、国内外での現地考察と資料調査を重ねた結果、金子夫婦が書き残した数多くの作品に触れることができただけでなく、一次資料と貴重な証言を数多く入手することができた。さらに多くの関係者、特に彼らと交流のあった中国の文化人、たとえば田漢、郁達夫、鈕先銘らの作品も多数発見した。それらの発見に基づく考察は、これまでに十数本の論文として日中両国の学術誌や論文集に発表した。本論は既刊論文を新たな構成のもとで整理し、最新の研究成果を踏まえて大幅に加筆・修正を行ったものである。

論文の構成は、研究の概要を述べる序章と、金子夫婦の関係を回顧する終章のほか、時系列によって三部（十二章）に分けられる。テーマはそれぞれ「放浪の旅」、「戦争抵抗」、「妻と夫の自伝」である。以下に概要を具体的に示す。

第一部「三度の中国行と「放浪の旅」」は五章から成る。いわゆる「放浪の旅」の実態について、一九二六年春に夫婦が経験した最初の中国旅行に遡ってその詳細を検証する。第一章「初めての中国旅行」は、まず背景として、1920年代における国際都市上海の歴史状況、日本のツーリズムの発展に伴う中国旅行および「支那趣味」の流行を検証した。そのうえ谷崎潤一郎を中心とする日中両国の文化人の交流の一環としての、金子夫婦の旅行の詳細を一次資料の発掘と検証によって明らかにした。第二章「上海と周辺都市の表象」では、この旅行から生まれた夫婦の共著詩集『鱻沈む』を始め、滞在中及び帰国直後に発表された数多くの詩作、紀行文または絵画作品を発掘整理したうえ、二人が描いた上海及び周辺都市の形象について、芥川龍之介や谷崎潤一郎の作品と対照しながら分析した。

一方、魯迅をはじめとする中国の著名な文化人との交友については、これまで事実誤認を含む金子自身の言説や、魯迅の日記の一部しか手がかりがなかった。第三章「中国文化人との交流」は、金子夫婦と日中の文化人が書き残した作品を通して、彼らと田漢、魯迅、郁達夫、白薇、陳抱一らとの交友について詳しく検証し、こうした交流活動が彼らの人生

と作品に強い影響をもたらした事実を明らかにした。

第四章「放浪の旅」再考は、夫婦が滞在した上海の生活だけでなく、蘇州と武漢への旅行の詳細についても、現地の歴史状況に注意しつつ考察した。さらに金子が「やらないことは、男娼ぐらいだ」とまで語った、パリでの「貧困生活」の実態についても、森三千代のパリ日記や紀行文集、またほぼ同時期にパリに滞在していた林芙美子らのケースと照らし合わせて検証し、パリに対する夫婦の感受性に落差が大きかったことに注目した。

第五章「描かれた上海とパリの都市風景」は、滞在中または帰国直後に書かれた二人の詩作や紀行文、さらに絵画作品を取り上げ、作品に描かれている様々な都市像、とりわけ上海とパリの形象について比較分析した。

要するに、金子夫婦の海外体験は、安易に「放浪の旅」や「無銭旅行」と一括りにすることができず、時期と場所によって性質が大いに異なることに注目しなければならない。また夫婦が行動を共にしていたにもかかわらず、現地の生活に対する適応能力と感受性には落差が大きく、その差異がそれぞれの作品にも大きく投影されている。経済的に恵まれず、かつ海外での旅行と滞在が数年にも及んだことは、彼らに現地の低層社会をつぶさに観察する機会を与えた。とりわけ中国の文化人との深みのある交流活動は、夫婦の中国ないしアジア認識に多大な影響を及ぼした。そしてこれらの体験を通して、東洋・南洋・西洋という「トライアングルの視点」(原満三寿)を獲得したからこそ、夫婦は日本を含む列強の植民地支配の現実を認識し、のちに日本の文化人の多くが巻き込まれたアジアへの侵略戦争に対しても、比較的冷静な態度で臨むことができたのである。

戦時中息子の徴兵忌避を敢行し、密かに多くの抵抗詩を創作し、戦後厳しく日本のアジア侵略を糾弾した金子光晴は、「抵抗詩人」として評価されてきた一方、近年その戦争抵抗を疑問視する声も一部現れた。第二部「戦時下の海外訪問と異郷文学」では、金子夫婦の戦争とアジア認識について、一次資料に基づいて全面的な検証を行う。

まず第六章「戦争の足音を聞きながら」は、1936年暮れに日本を再訪した郁達夫との再会の詳細を確認し、戦後間もなく日本兵に殺害された郁達夫に対する追悼の念と日本軍への怒りを顕にした金子光晴の作品を分析した。また原満三寿によって発見された金子光晴の未発表作品「支那名剣武勇伝一、龍神剣。」への検証を通して、金子光晴が『少年倶楽部』『少女倶楽部』などに寄稿した、中国や西洋を舞台にした多くの「童話」作品を取り上げ、そこに描かれた中国人と西洋人の形象について考察した。

第七章「金子光晴・森三千代の「北支」旅行」は、日中戦争が全面勃発した1937年に行われた「北支」訪問と関連作品を取り上げた。とりわけこれまでほとんど注目されてこなかった占領下の北京を描いた夫婦の紀行文と、天津の日本人社会を描いた森三千代の長編小説『あけぼの街』(1941)を取り上げ、中国に対して夫婦の揺れ動く心情を分析した。またその心情を具象化したものとして、第八章「中国軍人「柳劍鳴」の形象」では、森三千代と中国の軍人鈕先銘(1912-1996)との恋愛、そして友情について詳述した。

第九章「森三千代の仏印訪問と南洋文学」では、国の「文化大使」としての森三千代が行ったフランス領インドシナへの公式訪問について検証した。先行研究に注目しつつ、森三千代が当時発表した紀行文や、未発表日記などの一次資料を加えて、訪問の詳細を明らかにした。またこの訪問から生まれた彼女のフランス語詩集を含む紀行詩文についても当時のメディアの反響を注視しながら具体的に考察した。さらに今日ではほとんど知られていない森三千代の多くの南洋小説を取り上げ、金子光晴の南洋作品と比較しながら解説し、夫婦が抱えている南洋の人々への思いをつぶさに観察した。

第三部「『自伝』という名のもとで：妻の語りと夫の語り」は妻の自伝小説と、夫の小説を混ぜる「散文詩」（今橋映子）的な自伝というスタイルに注目し、両者の関係性を丹念に追いながら、文学作品として双方の特徴を比較分析する。まず第十章「二つの髑髏杯：それぞれの上海小説」では金子光晴の『どくろ杯』、および森三千代の上海小説「通り雨」（1940）と「春灯」シリーズ（1947-1950）を取り上げ、夫婦が描いた「上海ゴロ」の生態を、日本人居留民社会の歴史事実と照らし合わせながら分析した。そして第十一章「夫婦それぞれのパリ物語」では『ねむれ巴里』を、森三千代の『巴里の宿』（1940）と『巴里アポロ座』（1947）と比較しながら読み解く。パリが代表する「西洋」にときおり拒否的な態度を示した夫と、パリに飛び込み、異国の貧しい生活をむしろ享受していた妻との異なる姿勢は、現地の日本人社会における異文化対応の実態を炙り出しており、またそのまま二人が作り出した西洋人像にも反映されている。

第十二章「男と女、東洋対西洋の構図」では、日本近代文学の西洋描写における「自虐」感情について、西洋文明に対峙する中国文化人の例と対照しつつ検証した。そして中国文学に描かれた日中間の恋愛物語と金子光晴が描いた中国人女性像とも合わせてみた。実際、東洋対西洋という衝突の構図は、日中近代文学における共通の課題であり、男対女の関係図にもある程度反映されており、金子夫婦の仲にも一部影響を与えたのではないかとさえ思われる。終章では長年確執を抱えながらも、最終的に人生の「相棒」として認め合うこの数奇な夫婦の関係について、それぞれの作品を通して考えた。

東洋・西洋・南洋をまたぐ「トライアングル」の体験と視点こそ、金子夫婦の海外体験と異郷文学の特徴であり、本論文は、一次資料を多く含む日・中・仏の言語で書かれた資料を多用しながら、現地の歴史状況も検証しつつ彼らの海外体験の実態を最大限明らかにした。金子夫婦の海外旅行は、常に夫婦同伴で行われただけでなく、二人が共に生涯にわたって自らの体験を作品化し、しかもその形態が詩、エッセイ、自伝、小説、絵画と多種多様だった点で、内外の文学史上においてもほとんど類を見ない。本論文は夫婦双方の人と作品を合わせて検証するという研究方法を用いたことで、多くの新しい事実を明らかにし、彼らが描いた異国の風景と人物形象もより多彩で立体的になった。そして日本の近代文学史上長らく忘れ去られた森三千代の再評価に迫ったことで、かえって夫の金子光晴の真価を見極める契機になったことも、本論文の意義の一つとすることができる。